

母性看護学における新生児の健康診査と沐浴の学習過程と授業方法

松村 恵子^{1)*},
植村 裕子^{1)*}, 榮 玲子^{1)*}

¹⁾ 香川県立保健医療大学 保健医療学部看護学科

Newborn Health Check and Learning Process of Bathing in Maternity Nursing Science

Keiko Matsumura^{1)*}
Yuko Uemura^{1)*}, Reiko Sakae^{1)*}

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences

要旨

母性看護学における新生児の健康診査と沐浴について学生の自己評価の分析から、演習時・実習前・実習後の実態分析から学習成果を明らかにした。そして授業方法について検討することを目的とした。期間は平成23年6月～同年11月、対象は母性看護学実習前のA大学3年次生66名とした。測定は、文献検討の結果作成した新生児の健康診査と沐浴に関する26項目で構成した4段階評定で、演習時はビデオ撮影を行った。一元配置分散分析の結果、演習時・実習前・実習後のグループ間で有意差があったのは15項目、多重比較では「健康診査の目的」「健康診査の方法」「環境調整」「体重測定」「話しかけ」の全ての関係で有意差が見られた。また26項目全てで演習時から実習後では評定段階が上昇していた。看護実践能力の基礎づくりでは、継続的な学習過程を計画し、学生自ら技術行動の学習段階を確認できる教材の活用は学習成果に繋がると考える。

Key Words : 母性看護学 (maternity nursing science), 新生児 (newborn infant),
健康診査 (health check), 沐浴 (bathing), 学習過程 (learning process)

*連絡先：761-0123 香川県高松市牟礼町原 281-1 香川県立保健医療大学 保健医療学部看護学科 松村恵子

*Correspondence to : Keiko Matsumura, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

緒言

看護学の基礎教育課程において、学生が生命を慈しむ豊かな人間性の発達を基軸として、看護実践力の盤石な基礎づくりができるように、教員が授業方法を創意工夫することは、重要な課題の一つと考える。松谷美和子らは、看護学士課程における看護実践能力を育成する方法として、臨床現場に近い、文脈を持った学習環境の創造に、様々なチャレンジが行われていたこと、看護実践能力の評価方法については、自己評価が基本と述べている¹⁾。

母性看護学における講義・演習・実習の学習形態は、同じ次元でいずれも重要であり、しかも連動していることが肝要といえる。この学習過程では、的確な知識や理論に基づいて、また感性を根幹として、どのように考え看護技術行動を展開しようとしているのか、看護実践における技術を学習する目的意識が学生の内面で意味づけられることが大切となる。教員は、専門分野の看護実践に関する理論と概念に精通し、熟練した技能と判断力を持つことが必要となる。学生が講義や演習で学んだことを実習で実践できているのかどうか、そして対象のケアを実践したことから、新たな学習の発見に繋がっているのかどうかを見極め、教育意図的に支援する役割がある。笹木葉子らは、学生の母性看護学実習技術チェックリストを用いて技術到達率を明らかにし、講義で知識の定着とイメージ化を図り、演習で重点的に繰り返し練習できる環境を整える必要性を報告している²⁾。

これまでの先行研究では、母性看護学実習前の学内演習に関する報告³⁾、実習での看護過程展開に必要な知識技術の学習プロセスに関する報告⁴⁾、実習における学生の学びと実習目標との関連性に関する報告⁵⁾、沐浴技術演習における学生の評価と課題の報告⁶⁾、実習における技術経験に関する報告⁷⁾等がある。母性看護学実習のみ、或いは演習に焦点をあてた報告が多く、演習時・実習前・実習後の変化に焦点をあてた報告は見当たらない。

そこで、本研究では母性看護学における新生児の健康診査と沐浴の学習は連動すると考え分析した。講義と演習は「知る」、練習を繰り返す演習は訓練となり「心身に根づける」、実習は新生児のケアを「実践する」、この学習過程では学生が主体的に自己評価できることが要となる。今回は、グループ学習によって学生間の他者評価を受け、自己の技術行動を客観視し自ら修正できるようにビデオ撮影による学習機能を活用した。学習成果の向上をめざした授業方法であったのかどうか、分析した結果、いくつかの知見が得られたので報告する。

母性看護学の講義・演習・実習の概要

今日、母性看護学は、平成8年の「保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則一部改正」に基づいて、講義・演習は4単位、実習は2単位が必修単位である。本学では、母性看護学Ⅰを講義と小児看護学との合同演習で2単

位、母性看護学Ⅱを講義と演習で2単位、母性看護学実習は2単位で合計6単位である。

講義の目的は、母性看護学Ⅰでは、人間の生涯における性の発達と健康について学び、生命と性と生殖についての考えを深め、Human sexuality, Reproductive・Health/rightsの観点から新しい家族の誕生期にある人々の健康生活を支援するために、母性看護に必要な基礎的な知識、技術、理論について理解する。母性看護学Ⅱでは、周産期の妊娠・分娩・産褥における生理的・病理的現象、妊産褥婦と新生児の生理と病理、形態と機能の特徴について学び母性看護の対象の特徴を理解し、生命を慈しむ人間性と母性看護実践についての考えを深める。

演習の目的は、母性看護学における対象を理解し、対象に必要な知識と技術を演習によって統合することで基礎的な看護技術の習得をめざした主体的な学習への取り組みができる。

実習の目的は、妊婦、産婦、褥婦と新生児、父親など家族を含めた周産期における対象の健康に関する基本的な看護実践能力を自ら育てる。目標は大きく分けて 1) 妊娠期・胎児期の特徴を理解し妊婦の看護ができる。2) 分娩期の特徴を理解し産婦の看護ができる。3) 産褥期の特徴を理解し褥婦の看護ができる。4) 新生児期の特徴を理解し新生児の看護ができる。5) 地域で生活する妊産褥婦および乳幼児とその家族への看護が理解できる。6) 保健医療チームの連携・協働と看護者の役割が理解できる。7) 女性/男性の性と生殖に関する生命倫理について考察できる。

本研究に直接的に関係する単元の講義に関する教授学習案は表1に示した。

演習の項目は、妊婦の子宮底・腹囲測定、レオボルド触診法、胎児心音聴取、骨盤外計測、擬似妊婦体験、褥婦の観察と乳房ケア、着帯、妊婦体操、呼吸法と弛緩法、補助動作、産褥体操、新生児の健康診査、沐浴、オムツ交換、抱き方、授乳方法である。

その中で、実習において最も安全の確保が必要とされる「新生児の健康診査と沐浴」は、講義で知識や理論の学習、原理原則に基づいた実技は視聴覚教材を用いて視聴、演習で教員のデモンストレーションの後、学生は演習時間内で実施し教員は要点を確認、さらに学生に時間外での練習を課し、演習時間内で個々に実技試験を行い合格すると実習ができる。実技試験は、実習を想定して一人当たりの所要時間約20分である。学生は合格をめざして時間外での練習を重ね、グループメンバー間でビデオ撮影し自らの技術行動を客観視する学習を行っている。

表1 母性看護学Ⅱ 教授学習案

単元：《新生児の看護》講義12 時間(6回)

目的：新生児の特徴と看護について理解する。

教授上の一般目標	学習上の行動目標	教授学習の項目内容	日程	評価
1. 新生児を対象とした基礎的な看護について知識に基づき理解し考えを深めることをめざす。	1) 新生児期の生理的現象が説明できる。	①新生児期の生理的現象と病理的現象 【新生児期の経過】	5/11	終講時の評価方法 ①課題に関する自己学習記録の提出内容 ②総括的な客観的テスト
	2) 新生児期の病理的現象が説明できる。	A. 新生児の生理 (呼吸確立過程, 循環と血液の変化, 体温, 腎臓, 消化と吸収, 肝臓, 神経など)	5/14	
	3) 新生児の特徴と健康診査の目的, 方法について説明できる。	B. 新生児のアセスメント ②新生児の特徴と健康診査 ・観察(呼吸, 心拍, 体温, 姿勢, 四肢の運動, 反射, 成熟徴候など)	5/14	
	4) 新生児の生活とneedsに基づいた看護の方法について説明できる。	C. 新生児の看護 ③看護アセスメントと生活の援助 ・呼吸の確立への援助・保温 ・排泄・臍処置・沐浴・感染予防 ・抱き方・オムツの交換・着脱衣 ・授乳・栄養・排気など	5/21	
	5) ハイリスク新生児の特徴と観察について説明できる。	④ハイリスク新生児 ・病態・観察・援助 ・新生児の病理(新生児仮死, 低体温, 低血糖, 高ビリルビン血症, 新生児感染症, 先天異常など)	5/21	
2. 親と子と家族の看護, 社会との関係性について考えを深めることをめざす。	6) 親と子と家族の看護社会との関係性について自らの考えを発表できる。	⑤親と子と家族と社会 ・子どもの出生と家族の機能 ・家族の関係・親と子の関係 ・母児とのコミュニケーション技術 ⑥地域における親と子と家族	5/28	

目的

母性看護学における「新生児の健康診査と沐浴」の単元に焦点をあて、学生の自己評価の分析から、ビデオ撮影を行った演習時・実習前・実習後の実態分析から学習成果を明らかにし授業方法について検討する。

方法

1. 期間

平成23年6月～同年11月とした。

2. 対象

母性看護学Ⅰ・Ⅱの講義を修了した実習前のA大学3年次生66名とした。

3. 測定

研究者間で新生児の看護に関する文献⁸⁻¹²⁾検討の結果、新生児の健康診査と沐浴に関する26項目で構成する学生の自己評価表を作成した。この26項目は実習で行う新生児の健康診査と沐浴の看護方法に連動しており、行動目標の水準で構成し認知領域3項目、精神運動領域21項目、情意領域2項目とした。学生の自己評価は4段階評定で、0=全くできない、1=助言と手助けがあればできる、2=助言があればできる、3=助言と手助けを必要とせず一人でできるとした。自己評価表は3枚の用紙に演習時は黒色、実習前は赤色、実習後は青色で到達段階を記入とした。演習時と実習前は新生児人形と健康診査装置を活用した。演習時のビデオ撮影では、撮影後に映像を見て自らの技術行動を客観視し修正した内

容、到達状況などを自由記述すること、より安全で安楽なケアをめざして練習を重ね実習に臨むことを課題とした。実習では正常経過の新生児を受け持ち、一連の看護過程を展開した。

4. 分析

学生の自己評価得点は、IBM SPSS Statistics19による変数の記述統計、一元配置分散分析、多重比較を行った。演習時のビデオ撮影後の自由記述は、PASW Text Analytics for Surveys 3による内容分析を行った。

倫理的配慮

対象者に、研究の目的と方法、成績に関係がないこと、協力を拒否してもよいことについて説明し、自由意思による協力を依頼した。学生が記入する自己評価表と、ビデオ撮影後の自由記述内容は、実習終了後に無記名で回収し匿名性を確保することを約束した。また、データは研究目的において活用すること、学生が記入した自己評価表は統計的データ入力後に粉碎、捨てること、研究成果は学会発表等で公開することを説明した。回収によって同意を得たこととした。なお、本研究は香川県立保健医療大学研究等倫理委員会の承認を得て行った。

結果

1. 対象

研究協力者は66名全員で、平均年齢は20歳であった。

2. 新生児の沐浴と健康診査に関する学生の自己評価

記述統計の項目別平均値は表2に示した。26項目全てで演習時から実習後では評定段階が上昇していた。以下()内数値は平均値を表す。3点満点で演習時の全項目平均値は2.21、標準偏差は0.75で最も高いのは「8.浴槽に湯をため適温であるか確認できる(2.95)」,「14.足部より湯に入れからだ全体に湯をかけられる(2.95)」,最も低いのは「26.健康診査で得られた情報をアセスメントし沐浴の状況を報告できる(2.21)」であった。実習前の全項目平均値は2.72、標準偏差は0.48で最も高いのは「7.必要物品の準備ができる(3.0)」,「11.体重測定ができる(3.0)」,最も低いのは「2.健康診査の方法と留意事項が説明できる(2.69)」であった。実習後の全項目平均値は2.90、標準偏差は0.28で最も高いのは「8.浴槽に湯をため適温であるか確認できる(3.0)」,「11.体重測定ができる(3.0)」,「14.足部より湯に入れからだ全体に湯をかけられる(3.0)」,最も低いのは「24.ボディメカニクスを考えて実施できる(2.80)」であった。

一元配置分散分析の結果は表2に示した。演習時・実習前・実習後のグループ間組み合わせで1%有意水準では11項目、5%有意水準では4項目、合わせて有意差が

あったのは15項目であった。これらの15項目全ての評定段階は、演習時から実習前へ、実習前から実習後へと学習段階ごとに上昇していた。

有意差が認められなかった11項目は、全て精神運動領域の項目であった。認知領域の3項目「1.新生児の健康診査の目的が説明できる」,「2.健康診査の方法と留意事項が説明できる」,「3.健康診査の項目が説明できる」は、演習時に評定段階が低く実習後は高かった。

その後の多重比較では、演習時と実習前、演習時と実習後、実習前と実習後の全ての組み合わせの関係で「1.新生児の健康診査の目的が説明できる」,「2.健康診査の方法と留意事項が説明できる」,「5.新生児の沐浴実施環境の調整ができる」,「11.体重測定ができる」,「23.新生児への話しかけができる」の5項目は、5%有意水準で有意差が認められた。

3. 演習時のビデオ撮影に関する学生の所感

自由記述内容については、所感の全体像を知ることを用意して、文脈における内包関係を基にグループ化する言語的手法を採択し、共通の文字列でグループ化、共起規則の作成、抽出した内容をカテゴリ化した。全てのレコードは53、未カテゴリ化は6、カテゴリ化で出現頻度が多いのは「できる」32で、その内訳は「できる&自分&いる」≒12,「できる&自分&いる&見る」≒6等であった。次は「自分」26で、その内訳は「自分&いる」≒13,「自分&いる&見る」≒7等であった。続いて「見る」18で、その内訳は「見る&客観的」≒11等であった。カテゴリのタイプでは、名詞48、動詞47、形容動詞22、形容詞3であった。

この手法における具体的な内容について、代表的な例は、「ビデオを見ることによって、自分のできていないことに気付くことができ、それを意識して練習し実習でも気をつけて行うことができた」では、《ビデオ、知る、できる、自分、気をつける、見る》が抽出できた。「改善点があるので実習では自分ができていなかった点に気をつけながら沐浴をすることができた」では、《自分、できる、点、沐浴》が抽出できた。「ビデオ撮影により客観的に見るので課題が見つかり、実習までに改善でき、安全・安楽な沐浴の実施につながった」では、《客観的、課題、沐浴》が抽出できた。「自分が演習を行っている時は、それに夢中で中々客観的に自分を見ることができない。しかし、ビデオを撮って見ることで、自分のできていないところを知ることができ、気をつけて行うように心がけた」では、《ビデオ、知る、できる、自分、気をつける、見る》が抽出できた等であった。

表2 新生児の健康診査と沐浴に関する学生の自己評価(N=66)

項 目	平均値				
	演習時	実習前	実習後	<i>F</i> 値	有意確率
1. 新生児の健康診査の目的が説明できる	2.27	2.74	2.93	25.38	.000 **
2. 健康診査の方法と留意事項が説明できる	2.28	2.69	2.92	25.69	.000 **
3. 健康診査の項目が説明できる	2.33	2.81	2.95	30.25	.000 **
4. 健康診査ができる	2.59	2.92	2.96	20.76	.000 **
5. 新生児の沐浴実施環境の調整ができる	2.78	2.95	2.95	5.74	.004 **
6. 実施者の準備ができる	2.92	2.96	2.98	1.69	.186
7. 必要物品の準備ができる	2.90	3.00	2.98	4.76	.010 *
8. 浴槽に湯をため適温であるか確認できる	2.95	2.98	3.00	1.79	.169
9. 洗面器に湯を準備し原理原則に基づき 顔面が清拭できる	2.89	2.95	2.96	1.87	.157
10. 新生児を安全安楽に移動できる	2.84	2.95	2.96	4.22	.016 *
11. 体重測定ができる	2.86	3.00	3.00	5.79	.004 **
12. 新生児の支え方が安全で安楽にできる	2.78	2.92	2.86	2.04	.133
13. 片方の手で頭部を固定しもう一方の手で股間より 臀部を固定して安全に新生児を保持し移動できる	2.84	2.90	2.96	2.64	.074
14. 足部より湯に入れからだ全体に湯をかけられる	2.95	2.98	3.00	1.79	.169
15. 頭部, 頸部, 上肢, 胸部, 腹部, 下肢を洗える	2.89	2.96	2.93	1.34	.264
16. 安楽に新生児を腹臥位変換し背部, 臀部を洗える	2.84	2.96	2.90	2.16	.118
17. 全身観察しながら沐浴できる	2.59	2.84	2.89	9.36	.000 **
18. 安全・安楽に留意し所要時間内で沐浴ができる	2.77	2.87	2.95	4.99	.008 **
19. 沐浴後の保温に留意できる	2.89	2.95	2.96	1.87	.157
20. 臍部の観察と処置ができる	2.83	2.86	2.84	.10	.898
21. オムツと衣類の着衣が適切にできる	2.81	2.92	2.96	4.23	.016 *
22. 鼻腔の分泌物を取り除き整髪ができる	2.84	2.93	2.96	3.61	.029 *
23. 新生児への話しかけができる	2.65	2.92	2.92	12.16	.000 **
24. ボディメカニクスを考えて実施できる	2.45	2.72	2.80	10.32	.000 **
25. 物品の後片付けと使用場所の整備ができる	2.87	2.93	2.92	.73	.481
26. 健康診査で得られた情報をアセスメントし ・ 沐浴の状況を報告できる	2.21	2.72	2.90	29.21	.000 **

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

考察

本研究の目的は、母性看護学における「新生児の健康診査と沐浴」に焦点をあて、学生の自己評価の分析から、ビデオ撮影を行った演習時・実習前・実習後の学習成果を明らかにし授業方法について検討することであった。

第一に、演習時から実習後では26項目全てで評定段階の上昇が明らかになった。このことから、演習時にビデオ撮影を行い視聴し自己評価、学生間で他者評価した

ことの学習成果があったと考える。

服部らは、看護技術習得のために繰り返し練習する過程で、評価的視点を持って自己を客観視する方法としてビデオが役立つのである。ひとりで吟味するだけでなく、他の学習者の実施場面を見たり、技術場面の再現による具体的な意見交換を通して、視野を広げることができる。繰り返し視聴することで、1回では見過ごしていたことに気づくことができる。望ましくない行動や不必要な行

動をしている場合は、なぜそのような行動をするのかについて、前後の行動も合わせた一連の流れについて分析的に見て検討することができると述べている¹³⁾。

今回のビデオ撮影に関する学生の自由記述内容では、「客観的に見ることで課題が見つかり実習までに改善できた」、「自分ができていないところを知ることで実習では意識して注意することができた」、「ビデオ撮影のために懸命に練習したのがよかった」などの肯定的な記述が見られた。記述内容を分析したカテゴリ化では、「できる」、「自分」、「見る」、「いる」、「客観的」、「実習」、「沐浴」などの出現頻度が多いことが明らかになった。このことから学生間でビデオ撮影し視聴することで、主体的学習を喚起した動機づけとなり有用性の高いグループダイナミクスが展開され、仲間意識を持つ雰囲気で学生間評価が成立し、客観的に見る視点から評価的視点へと変化したのではないかと推測できる。そして、自らの演習内容をありのまま受け取ることから、学生間で意見交換することによって、事実の根拠を探り、客観的で分析的に理解しようとする批判的な考えとなり、クリティカルシンキングに繋がる実践に結びついたと考えられる。

第二に、演習時から実習前へ、実習前から実習後へと学習段階ごとに上昇し有意差を認めた15項目全てで、実習後の評価段階が高いことが明らかになった。このことから、新生児人形や健康診査装置を用いた学内演習の模擬体験学習は、実習で看護実践の対象となる新生児の健康診査と沐浴に効果的に繋がり、学生は継続的に連動する学習過程を実体験していると考えられる。井田らは、多くの学生は学内での学びを実習で様々な体験をすることでさらに深め「ウェルネス志向」で対象を捉えることができるようになっていたと述べており、また、各領域実習を通し現在何ができていて、何ができていないのかというように、学生が自らの課題として認識できるように示唆していくことが必要であると述べている⁹⁾。

今回、有意差を認めた15項目の中から「26.健康診査で得られた情報をアセスメントし沐浴の状況を報告できる」の実例をみると、演習時と実習前では、学生が主体となり動かない新生児人形に話しかけ、呼吸、心拍、体温を測定し、頭部から四肢末端まで系統的に観察し原始反射なども含めた健康診査を行い、順序よく沐浴している。実習では、動いたり啼いたり頭がすわっていない新生児が主体となり学生は客体となる。講義や演習の学びで実践しようとしても、新生児は排泄していたり啼きやまなかったりするとオムツ交換や抱っこというケアが必要になってくる。この実体験によって、学生は客体となり対象を中心としたケアを学んでいる。新生児人形では実感できなかったケアの対象と温かいぬくもりや感性が相互浸透する看護実践からの学びによって、現実味を持った臨場感を体験し、情報のアセスメントや状況の報告での課題が明確となり、学習成果に繋がったと考えられる。

第三に、演習時・実習前・実習後の全ての関係で有意差を認めた5項目について、「1.新生児の健康診査の目的が説明できる」、「2.健康診査の方法と留意事項が説明できる」、「23.新生児への話しかけができる」は、いずれも評価段階は演習時に低く実習前から実習後にかけて高いことが明らかになった。これらの行動目標は、講義と演習の限界とも考えられるが、学生間で演習時に「説明を受ける」学生役割の設定や、新生児とのコミュニケーション技術について講義や演習でロールプレイによって看護場面を疑似体験できるなど、さらに授業方法を創意工夫する必要があると考える。渡辺らは、学生が通常ふれあう機会の少ない新生児との具体的な関わりを通して対象を理解し、複雑な技術を習得することによる達成感を味わうことによって、看護学生としてのモチベーションを高めるきっかけとなるよう支援する必要があると述べている⁹⁾。

また、看護教育の内容と方法に関する検討会報告書¹⁴⁾において、看護実践能力育成のための教育方法として、今まで以上に講義・演習・実習を効果的に組み合わせ、実体験を増やし、実践の振り返りを行い、経験できない技術は、シミュレーターを活用するなど演習で補完する等の工夫が必要であると提示している。

看護学は実践的な学問であり、教員は講義・演習・実習は連動する授業であることを深く認識してこの一連の授業を同じ次元で重要視し実践する必要があると考える。この実践によって学生がどのような学習段階にあるのか、どのような意味づけを行っているのか観察できる。観察した内容は個々の学生と話し合い相互理解をはかることが大切と考える。学習成果が顕在化し、その相乗効果として満足感や達成感が得られ自尊心を高めるきっかけとなれる支援が重要と考える。

舟島らは、内発的なフィードバックは学生自身の中にあり、自己の行動に対する知覚や行動の改善に反映される。学生の多くは基礎的知識と初歩的技術を修得しさえすれば、自己の行動を適切に判断できるが、なかには自己の行動を評価し、実習目標に照らしそれをどのように改善すべきかについて決定できる学生もいる。学生に対する誠実な関心の提示、即時的フィードバックと肯定的強化の提供、自己評価の促進、臨床における看護の演習に関する能力が必要であるとしている¹⁵⁾。

この教員の役割や教育的支援を包含する授業方法の一つとして、学習進度に対応した形成的評価を行うことが重要と考えている。学生は講義で習得した知識や理論を基盤に、演習でデモンストレーションした教員の看護モデルを模倣し、次に繰り返し練習する。練習によって訓練した技術行動は、ビデオ撮影や視聴によってフィードバックされ、学生間での意見交換などの交流を通して得た学習成果を、さらに教員が学生の発達支援としての確に形成的評価する。

この形成的評価によって、目標達成をめざした学習状

況や学習段階、看護実践力の習得状況、或いは学生個々が持つ技術習得過程の問題や課題に関するフィードバックを学生に伝えることができる。形成的評価技法の実践について、かつて報告¹⁸⁾してきたが、教員の役割は学生に習熟をめざした変化が生じるところにあり、この変化において、ある場合は意図的に或いは自然発生的に、さまざまな方法で関わるのが大切となる。さらに、その過程において教員はどのような変化が可能であり望ましいかについて決定する必要がある、この決定した具体的内容について、学生が自らの力で改善できる学習方法を伝え支援する教育的かかわりが最も重要と考える。

結語

本研究の結論は、母性看護学における新生児の健康診査と沐浴の学習過程では、学生と教員は講義・演習・実習は連動する一連の授業と認識し同じ次元で重要視して実践することによって学習成果が顕れるといえる。また、学生は講義で習得した知識や理論を基盤に、演習で教員の看護モデルを模倣し繰り返し練習する。練習によって訓練した技術行動は、ビデオ撮影や視聴によってフィードバックされ、自らを客観視することで改善をめざした動機づけとなる。さらに、学生間で意見交換や実技試験など教員が的確に形成的評価することによって、演習が充実し実習での経験による学習成果に繋がるといえる。

今後の課題は、講義・演習・実習の授業方法において、学生間で演習時に「説明を受ける」学生役割の設定や、新生児とのコミュニケーション技術について講義や演習でロールプレイによって看護場面を擬似体験できるなど、創意工夫する必要がある。また、学内でのビデオ撮影や視聴、実技試験においては、顕在化する学生の技術行動に注目してきたが、今後、その行動の水面下にある感性などの精神活動、意味づけなどの論理的思考、判断などの批判的思考を育てる記録の産物であるポートフォリオに着目することである。

さらに、学ぶという活動のなかで感動的な出会いがエネルギーとなるため、そして教えるという活動が常に新しいチャレンジとして精彩を帯びるために、学生の未知数の力に教えられ教えつつ、それぞれの心に深い躍動を産むことができるように看護学を探究していきたい。

謝辞

本研究にご協力くださいました学生の皆様に深く感謝いたします。なお、本研究の一部は、平成24年8月の日本看護学教育学会第22回学術集会で発表いたしました。

文献

- 1) 松谷美和子, 三浦友理子, 平林優子, 佐居由美, 卵野木健他. 看護実践能力: 概念, 構造, および評価. 聖路加看護学会誌 14(2): 18-28, 2010.
- 2) 笹木葉子, 小堀ゆかり. 母性看護学実習における学生の技術経験状況調査. 北海道文教大学研究紀要 36: 81-91, 2012.
- 3) 岡 宏美. 母性看護学実習における学内演習の検討. 新見公立短期大学紀要 28: 109-113, 2007.
- 4) 谷口道英, 服部律子, 布原佳奈, 堀内寛子, 名和文香他. 母性看護の看護過程の展開に必要な学習プロセスと臨地実習との関連. 岐阜県立看護大学紀要 7(2): 19-24, 2007.
- 5) 井田歩美, 斎藤早苗. 母性看護学実習における学生の学びと実習目標との関連性. ヒューマンケア研究学会誌 2: 36-40, 2011.
- 6) 渡辺恭子, 新小田春美, 北原悦子. 母性看護学演習における学生の評価と課題—沐浴技術演習の評価から—. 九州大学医学部保健学科紀要 7: 83-94, 2006.
- 7) 濱 耕子. 基礎看護教育における母性看護実習の取り組みと今後の課題. 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要 5: 81-89, 2004.
- 8) 新藤幸恵. “マタニティサイクルにおける母子の健康と看護”, メヂカルフレンド社, 東京, 482-531, 2009.
- 9) 太田操編著. “ウエルネス看護診断に基づく母性看護過程”, 医歯薬出版株式会社, 東京, 91-101, 2005.
- 10) 山田里津. “日本看護学校協議会 最新看護学教育ガイダンス”, 第2版, 医歯薬出版株式会社, 東京, 210-235, 1999.
- 11) 櫛引美代子. “カラー写真で学ぶ周産期の看護技術”, 医歯薬出版株式会社, 東京, 1-47, 1998.
- 12) 川島佳千子編, 松村恵子共著. “母性臨床看護のポイントと事例展開”, 真興交易医書出版部, 東京, 159-170, 1998.
- 13) 服部恵子, 藤尾麻衣子, 小元まき子, 宮脇美保子, 島田千恵子他. 看護技術の習得過程におけるビデオ活用の効果. 順天堂大学医療看護学部医療看護研究 2(1): 110-115, 2006.
- 14) 厚生労働省医政局看護課: 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 厚生労働省 1-26, 2011.
- 15) MARILYN H. OERMAN, KATHLEEN B. GABERSON. “Evaluation and Testing in Nursing Education” 舟島なをみ監訳 (2001) “看護学教育における講義・演習・実習の評価”, 医学書院, 東京, 197-227, 2001.
- 16) 松村恵子. 臨床実習における評価—形成的評価技法の実践—. 聖母女子短期大学紀要 8: 12-20, 1995.

Abstract

The purposes of the present study were to clarify learning outcomes of students in a maternity nursing science seminar and to improve the teaching methods through investigation on their actual statuses during the seminar, before and after its exercise based on their own evaluation about newborn health check and bathing in maternity nursing science seminar.

The period of study was June to November in 2011. Sixty-six students before receiving the seminar in the third grade of University A were selected as the subjects. Four-rating estimation method for 26 items described in previous reports was applied to the results. The seminar was carried out by using videotaping. One-way variance analysis was applied to the estimation results. The analysis revealed that the estimated values for 15 items were significantly different among three student groups during the seminar, before and after the exercise. Also, multiple comparison test revealed significant differences in all items of “purpose of health check” , “its method” , “environmental manipulation” , “measurement of body weight” and “accosting” . The estimated values for 26 items were all elevated in the student groups during the seminar and after the exercise. Planning of continuous learning process and utilization of teaching materials by which students can check their study stage of technical action would lead to fundamental learning of practical nursing ability.

受付日 2012 年 10 月 9 日

受理日 2013 年 1 月 18 日